

大学の同窓会が母校創立100周年に向けて募金活動をさまざま展開してきましたが、その一環として、2月17日にカンテレ・コンサートを企画しました。これまでに私はカンテレを聞いたことがありませんでしたので、とても楽しみにしてきました。

ホールの正面のテーブルの上に、お琴とハープの合いの子のような、可愛らしいカンテレが置いてありました。やがて、フィンランドのブラウスとスカートの舞台衣装をまとった奏者、はざた雅子さんが登場し、美しい、澄んだ音色を響かせて演奏されました。夢見心地のような、幸せな時間でした。



カンテレ(kantele)はフィンランドの民族楽器です。これはコンサート用の楽器で、80cmくらいの長さの板に39本の金属の弦が張っており、小指以外のすべての指を用いて弾いて演奏します。西洋音楽と同じ7音階で、半音を作れるレバーもあり、長短の調ができます。

もともとカンテレは50cmくらいの長さの三角形の木の板に、弦を5本張って演奏する素朴なものだったようですが、いろいろ開発されてきたとのこと。この楽器をフィンランドの子どもたちは学校教育の中で学び、とても親しんで演奏しているといいます。民族楽器と聞いていたので、独特の音階があるのかしら、と期待していましたが、西洋音楽と同じということです。紀元前6世紀ごろの古代ギリシャの数学者・哲学者ピタゴラスが理論づけた音階をもとに西洋音楽は生まれ、発展してきたと言います。北欧という辺境の民族も、音楽性においてはヨーロッパなのだと思います。

去年、フィンランドの民話から生まれた叙事詩の「カレワラ・タリナ」を読みました。フィンランドの始祖、ワイナモイネンが大海原から誕生する場面から始まる昔話ですが、彼は素晴らしい言葉を用いて、素晴らしい声で、カンテレを弾きながら、歌います。その歌声に、地上のすべては心惹かれて、動き回っていくのです。巨人のような登場人物は男も女も、たくましく、愛に生き、自分のいるべき所を求めて進みます。折々に歌うワイナモイネンは、その知恵ある言葉のゆえに永遠に敬愛されます。彼は高齢化していき、体力も衰えていき、勤勉なイルマリネンが国を引き継いでいきますが、ワイナモイネンの心には若者のような初々しさが残り、歌には人の心を揺さぶる力があります。カンテレの音もこの世のものとは思えないほど清らかで美しく、すべての人が聞きほれるのです。歌によって世界が広がっていくというフィンランドの世界に私は魅了されました。ですから、なんとしてもカンテレを聞いてみたいと思ったわけです。

はざた雅子さんはフィンランドに飛行機で降り立った時、体調がすぐれないのを感じたけれども、森と湖の国の小さな田舎の町で、白樺の木々に囲まれているうちに、白樺の香気が体に染みこんできて、すっかり元気になった、フィンランドはそういう豊かで、素朴な自然の力が満ちているところだと言われました。自然の情景を歌う民謡、また、故郷を偲ぶ民衆の心を反映した情感溢れる歌など、優しさに溢れる曲を演奏されました。フィンランド人の大好きな作曲家メリカント(1868-1924)の「優しく響けわが悲しみの歌」の主題のメロディは讚美歌21-305にそっくりでした。スウェーデン人にも影響を与えていると思いました。最後は、シベリウス(1865-1957)のフィンランディア賛歌でした。私の愛唱讚美歌です。シベリウスはフィンランドの誇る最高の作曲家とのこと。私の音楽の好みはフィンランド的かもしれない…とったりしています。これまで北欧といえば、デンマーク。アンデルセンの童話に育てられ、レゴ・ブロックの玩具で子どもを育てたと感じています。今はもっともっと北欧を知りたいという気持ちで、カンテレのCDを楽しみながら聞いています。